

民主化闘争情報

No. 1018
2019年5月9日
発行 日本鉄道労働組合連合会
(JR連合)

4月23日、「昭和解体」の著者・牧久氏（元日経新聞記者・ジャーナリスト）による「暴君 新左翼・松崎明に支配されたJR秘史」（小学館）が発売された。

「昭和解体」は、昭和最後の20年に起きた日本の政治経済最大の事件である「国鉄分割・民営化」の「30年目の真実」として、当時の国鉄当局と国鉄労働組合を焦点に描かれた。今回の「暴君」では、動労、JR東労組の中央執行委員長にして、警察庁が「革マル派創設時の副議長」と指摘し、革マル派の実質的な指導者と見られた「松崎明」氏にスポットを当てた。

牧久氏の著書「暴君」発売！ 「JRの妖怪」松崎明の真相に迫る！

牧氏は松崎氏について『日本の労働運動が燃え上がった戦後昭和で、もっとも先鋭的で過激な活動を繰り広げた「動労」（国鉄動力車労働組合）の闘士として、当局の合理化（リストラ）に猛然と反発、（中略）“鬼の動労”の象徴的存在だった。しかし、八〇年代後半、中曽根政権が進めた国鉄の分割・民営化に徹底抗戦する国労を切り捨て、それまで犬猿の仲だった、当局寄りの「鉄労」（鉄道労働組合）と手を組み、組織を挙げて労使協調、民営化賛成に回り、大転換の先頭に立った。“松崎のコペルニクスの転換（コペ転）”とも呼ばれたこの男の見事な“変心”によって国労は瓦解し、国鉄分割・民営化は軌道に乗って走り始める。松崎は「国鉄改革」の最大の功績者のひとりとなったのだ。そして、民営化後、崩壊した国労に替わりJRの組合を率い、会社側にも「影の社長」のような権勢をふるうことになる。（中略）だが、松崎には、労働組合の“名士”とは別の、もうひとつの顔があった。非公然部隊を組織し、陰惨な“内ゲバ”で数々の殺人・傷害事件を起こしてきた新左翼組織「革マル派」の幹部でもあったのだ』と表現した。

そして、松崎氏が「ニアリー・イコール」という論理で会社経営への容喙を宣言し、“労使蜜月”の関係のもと、まさに「JRの妖怪」と変貌していく様子を詳細に描いている。

さらに、最後には423ページから始まる『三万四五〇〇人の大脱走』の章で、2018春季生活闘争におけるスト権行使に伴うJR東労組の組合員大量脱退について、「労使共同宣言の失効」により“労使癒着”に完全に終止符が打たれたことにも触れた。また、今年度から400億円台の財政支援を受けるJR北海道で2011年の石勝線列車事故後、3年足らずの間に社長経験者が2人も入水自殺したことについて、『その異常事態の深層に迫る調査報道は皆無とっていい。かつてマスメディアのタブーとなったJRの妖怪・松崎明の“亡霊”はいつまで北の大地を彷徨い続けるのだろうか』と、現状を憂えた。

小学館「暴君」紹介サイト



**多くの人がこの本を読んでいるという事実が
JRに浸透する革マル派組織を追い詰める！**